様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　２ 日現在

機関番号：２４４０５
研究種目：若手研究
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ１３０７３

研究課題名（和文）外国語学習における発音の協働的学習法の開発――周辺的参加者の活用――

研究課題名（英文）Development of Collaborative Learning Methods for Pronunciation in Foreign Language Learning: Focusing on Peripheral Participants

研究代表者
大山　大樹（OYAMA, Daiki）

大阪公立大学・大学院文学研究科・都市文化研究センター研究員

研究者番号：７０８０５５６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、外国語学習における発音の協働的学習法を開発した。これは、コミュニカティブ・アプローチやCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）の考え方に基づき、学習者の主体性・協働性・自律性を重視したものである。具体的には、フランス語初級クラスにおける実践をデータとし、「グループ形式でペアワーク」「発音相談タイム」「発音の教え合い」という3つの方法を開発した。そして、それぞれにおいて学びが生起した相互行為の分析と、そこから明らかになった効果と問題点を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、授業内の発音学習について、学習者の主体性・協働性・自律性を重視した学習方法を提案する点に意義がある。なぜなら、コミュニカティブ・アプローチが広がるなかで、会話・読解・作文などは学習者同士で学び合うようになったが、発音は依然として「教師がいかに正しい発音を教えるか」が前提になっているからだ。くわえて、本研究は、従来は排除の対象であった活動に参加しない学習者に教育的価値を見出す。この学習者は、グループワークに関する諸研究では研究の対象にされないばかりか、フリーライダーと見なされ排除されてきた。本研究は、この伝統的な見方を問い直す。

研究成果の概要（英文）：This study developed three collaborative learning methods for pronunciation in foreign language learning. Based on the principles of communicative approach and CEFR, it emphasizes learners' autonomy, collaboration, and initiative. Specifically, using data from practical activities in a beginner French class, three methods were developed: "Pair work in group," "Discussion of pronunciation, "Peer teaching of pronunciation." The study analyzed the interactions in each method and highlighted the effects and issues.

研究分野：外国語教育

キーワード：グループワーク　周辺的参加者　発音学習　相互行為分析　教え合い　質的研究

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

コミュニカティブ・アプローチが広がり、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）の考え方がスタンダードとなりつつあるなかで、外国語の授業は大きく変わった。教師が学習者に対して一方的に講義をおこなう伝統的な知識伝達型のスタイルは否定され、学習者の主体性・協働性・自律性が重視されるようになった。具体的には、多くの授業でペアワークやグループワークが導入された。そして、会話だけでなく、これまで独りの作業と考えられてきた読解や作文など活動についても、他の学習者と協働しながらおこなう方法が開発された。

このような流れのなかで、発音指導については内容も時間も簡略化され（菊地，2014）、発音の規則がほとんど扱われないテキストも増えた。そして、教育現場では、教師が時間をかけて発音を丁寧に指導することが少なくなった。しかし、発音指導の研究は、「教師が正しい発音方法を教える」という従来の考え方を依然として前提に置き、学習者の主体性・協働性・自律性を重視せず、習得の問題点を明らかにする基礎研究や、歌などを用いた具体的な指導法を開発するものがほとんどである。

一方、実際のグループワークをつぶさに観察すると、教師が発音の仕組みなどをほとんど説明しなくとも、学習者たちは発音の仕方を教え合ったり、上手な学習者の真似をしたりするなど、直接的・間接的に学び合っている様子が頻繁に観察される。すなわち、先行研究の問題は、教師の講義形式による発音の指導法を探求するばかりで、発音が他者との協働のなかで学ばれるという視点が欠如している点にあると考えられる。

２．研究の目的

本研究は、「教師がどのような仕掛けをすれば、学習者たちに発音を他者との協働のなかで学ばせることができるのか」という問いを出発点とし、相互行為の質的研究をとおして、発音の協働的学習法の開発を目的とする。具体的には、教師が介在せずとも学習者たちだけで学びを深めていけるように、リフレクションを誘発する仕掛けをグループワークのデザインに組み込む。「参加しなくてもよい機会」と呼びうるこの仕掛けによって、学習者をグループワークの主たる活動の進行に関与せず、ある程度自由に行動できる状態に置くことができる。すなわち、本研究は、この機会を意図的に作り出すことでリフレクションを誘発するグループワークのデザインを新たに提案するものである。

申請者はすでに会話のグループワークのデザインにこの仕掛けを導入し、リフレクションが促されることを実証した（大山，2017）。本研究は、この知見が発音学習にも応用可能であることを示す。くわえて、この方法の問題点を明らかにし、それを解決する別の方法も提案する。

３．研究の方法

申請者が考案した発音の協働的学習法において、学習者たちが実際にどのような課題に直面するのか、そして学びが生起するにあたり何が効果的に機能しているのかを質的研究により明らかにする。

(1) データと収集方法

申請者が担当する約 30 名のフランス語初級クラスにおいて、前期・後期をとおしてデータを収集する。3～4 名でグループを作り、各グループに 360 度撮影可能なビデオカメラ 1 台設置し、授業の冒頭から終了まで録画する。くわえて、授業プリント、アンケート、ポートフォリオを副次的データとして用いる。

(2) データの分析方法

録画記録の分析には「相互行為分析」を用いる。構築主義に基づくこの方法は、社会学のエスノメソドロジーに端を発し、西阪（1997）により深められたものである。この方法をもちいて、発語だけでなく、わずかな言いよどみやコンマ数秒の間隙、視線の動きや顔の向きなども含めて、発音に関する学びが生起する相互行為がどのように組織されているのかを詳細に明らかにする。くわえて、授業プリント、アンケート、ポートフォリオを用いたトライアンギュレーションにより、分析の客観性を高める。

４．研究成果

本研究は、発音の協働的活動方法を開発するなかで浮かび上がった問題点を改善していった結果、3 つの方法を開発することができた。以下、それぞれの概要と効果、および学びの実態を簡潔に報告する。

(1) グループ形式でペアワーク

① 概要

3 名または 4 名でグループを作り、ペアワークを順番におこなう（図 1）。強制的に順番待ちの

機会、すなわち活動に参加しない／しなくてもよい状態を活動の中に意図的に作り出す。

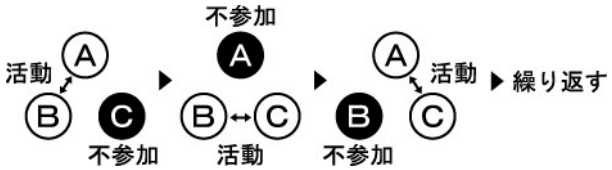

図 1 グループ形式でペアワーク

② 相互行為の実態
学習者たちは順番待ちの機会を利用し、さまざまなリフレクションをおこなうようになった。具体的には、他のメンバーの発話を聞いて気づきを得る、自分のターン中に抱いた疑問を調べる、自分の順番に備えてリハーサルをする、という行動が観察された。

③ 効果と問題点
グループワークにおける順番待ちの機会が、各自のアウトプットとリフレクションのくり返しを促しうることが示された。しかし、リフレクションのなかで各学習者が得た疑問や気づきが言語化されることは少なく、結果としてグループ全体で共有されないという問題点が明らかになった。

(2) 発音相談タイム
① 概要
上記の「グループ形式でペアワーク」の問題点を解決するために考案された。発音の疑問について、グループのメンバーと話し合うという、発音についてのメタ的な活動である。基本的には当該の活動中に抱いた疑問の言語化を促すが、当該の活動以外での疑問を述べてもよい。例えば、教科書本文の発音をクラス全体で練習したあとや、グループワークのあとに数分の「発音相談タイム」を組み込む。

② 相互行為の実態
学習者たちが全体練習やグループワークを進めるなかで抱いた疑問や気づきが言語化され、それが共有されることで、グループ全体にリフレクションを促した。その結果、発音についての理解が深められた。例えば、日本語には無いｒの発音方法の確認やその困難さの共有、リエゾンやアンシェヌマンといった単語間の音の繋がりにかんする規則の確認などが、各自の既存知識や教科書を参照しながら、積極的に話し合われた。

③ 効果と問題点
グループワークを外から観察していると、スムーズに進行していると見えることが少なくない。しかし、学習者たちはその中でさまざまな疑問や気づきを抱いており、それを言語化してもよい機会を用意すれば、学びを深めうることが示された。一方、単に言語化するように指示しただけでは、この活動に費やせる時間が限られていることもあり、発言者や話題が偏ってしまった。すなわち、疑問や気づきを外化する機会が、各学習者に平等に担保されないという問題点が明らかになった。

(3) 発音の教え合い活動
① 概要
上記の「発音の相談タイム」の問題点を解決すべく、外化する機会を平等に担保することを目的として考案された。くわえて、学び合いの方法として国内外で広く活用されているジグソー（Aronson, 2000）について、筆者が実際に抱いた問題点（時間がかかる、教師役の負担が大きい、生徒役がメモをとるだけになる）を乗り越えるべく考案されたものでもある。具体的には、ジグソーのようにインフォメーション・ギャップを利用するのではなく、「既習事項を教え合う」活動をデザインした。各学習者に担当箇所を与え、その部分の発音について、自分が可能な範囲でグループのメンバーに教えるように指示する。例えば、教科書の本文や会話例の発音について、全体練習をしたあとにこの活動を組み込む。

② 相互行為の実態
教師役となった学習者は、まず担当箇所を発音することから始めた。しかし、それにとどまらず、本人が重要だと感じた要素、例えば綴りと発音の関係や、リエゾンなどの音の繋がりに関するルールについて言及した。そして、その中で疑問や気づきが生じると、学習者間の「教える／教えられる」という関係が一旦解消され、グループ全員で話し合う様子が観察された。

③ 効果と問題点
教える役割を強制的に与えることは、既存の知識の外化を促しうる。さらに、そのなかで疑問

や気づきが生じ、それがグループ全体のリフレクションのきっかけになる。しかし、発音を教えることの難しさから、教える側の負担をいかに減らすかという問題点が明らかになった。この問題点は、教師からの最初の指示を学習者の慣れ具合によって変えることで解決できると考えられる。例えば、導入時は「分からない箇所は飛ばしてもよい」など、活動を終わらせることを優先する。そして、慣れてくれば、細かい説明を促す。また、教科書に発音一覧のページがある場合は、活動前に言及しておいてもよい。学習者はその存在を忘れていることが少なくないからである。

以下は、上記 3 つの実践の概要と効果、そして問題点をまとめたものである。

表 1 グループワークで発音を教え／学び合う実践の特徴

名前	概要	効果	問題点
グループ形式でペアワーク	3～4 名でグループを作り、強制的に順番待ちをさせる	順番待ちの間、リフレクションがおこる	疑問や気づきが共有･外化されにくい
発音相談タイム	全体練習やグループワークのあとに、疑問や気づきを相談させる	疑問や気づきが共有・外化される	限られた活動時間の中で、発言者が偏る
発音の教え合い	それぞれ担当箇所を決め、グループのメンバーに順番に教える	外化する中で、疑問や気づきが生じる	教師役の負担が大きい可能性がある

＜引用文献＞
① Aronson, E. (2000). The Jigsaw Classroom. [Online Available: 2024/5/31], https://www.jigsaw.org/
② 大山大樹 (2017).「グループワークにおける発語していない学習者のインタラクションとリフレクティブ・グループワークの実践――フランス語クラスと日本語クラスの相互行為分析から――」, 大阪市立大学大学院文学研究科博士論文.
③ 菊地歌子 (2014).『フランス語発音指導法入門』関西大学出版部.
④ 西阪仰 (1997).『相互行為分析という視点――文化と心の社会学的記述』金子書房.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 福島祥行・中條健志・大山大樹	４．巻 37
２．論文標題 教科書「で」教えるために――教えあい／学びあい促進の実践――	５．発行年 2023年
３．雑誌名 RENCONTRES	６．最初と最後の頁 16-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 福島祥行・中條健志・大山大樹	４．巻 36
２．論文標題 グループワーク実践 truc 2021	５．発行年 2022年
３．雑誌名 RENCONTRES	６．最初と最後の頁 45-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 大山大樹
２．発表標題 発音の教え合い活動における対比をもちいた詳細な説明の会話分析
３．学会等名 大阪公立大学フランス文学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 福島祥行・中條健志・大山大樹
２．発表標題 教科書「で」教えるために――指定教科書をつうじた教えあい／学びあいの促進――
３．学会等名 第37回関西フランス語教育研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 大山大樹
２．発表標題 発音の教え合い活動における教科書のページめくり
３．学会等名 大阪公立大学フランス文学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 大山大樹
２．発表標題 発音を順番に教え合うグループワークのありよう
３．学会等名 日本フランス語教育学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 大山大樹
２．発表標題 フランス語初級クラスにおける発音の教え合い活動の実態――聞き手のふるまいに注目してーー―
３．学会等名 大阪公立大学フランス文学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 福島祥行・中條健志・大山大樹
２．発表標題 グループワーク実践truc 2021
３．学会等名 第36回関西フランス語教育研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 大山大樹
２．発表標題 フランス語初級クラスにおける発音を教え合うグループワークの相互行為分析
３．学会等名 大阪市立大学フランス文学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 大山大樹
２．発表標題 グループワークにおける共鳴による発音の学び合いの相互行為分析
３．学会等名 大阪市立大学フランス文学会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関